



日本一の天狗面 迦葉山龍華院弥勒寺 (群馬県沼田市)

群馬県北部の沼田市。その市街地から北方に一六キロメートルの深山幽谷にあるのが迦葉山龍華院弥勒寺。『迦葉山』の名で親しまれ、春は新緑、夏には霊鳥「仏法僧」がさえずり、秋は紅葉、冬は雪が周囲を覆います。

「日本一の天狗面」や「交通安全身代わり天狗面」が奉納され、日本三大天狗の霊山の一つに数えられる迦葉山。沼田の夏の一大祭事「沼田まつり」では迦葉山の天狗面を神輿に仕立て、女性だけで担ぐ「天狗みこし」が登場し、まつりを盛大に彩ります。

迦葉山龍華院弥勒寺の歴史は古く、釈尊の高弟であった迦葉尊者が亡くなったとされるインドの鶏足山に迦葉山が似ていたことから、嘉祥元年（八四八）に慈覚大師円仁が四九院を建てて開創しました。その後、康正二年（一四五六）に天巽慶順禪師が再興し、曹洞宗へと改宗。天巽禪師の高弟に中峯尊という神童がいて、神通力を持って伽藍造営から布教伝道にまで力を発揮し、禪師を支えました。

天巽禪師が二世大盛禪師に住職の座を譲ると、中峯尊は「私は迦葉（仏陀の十大弟子の一人）の化身である。今後は永くこの山に霊し、末世の衆生の抜苦与楽せん」と誓願し、案山峰より昇天。その後には天狗の面が残されていました。

以来、「天狗さま」と崇められた中峯尊は、鎮守中峯尊大薩埵として祀られ、迦葉山信仰の中心となり、その御利益を信じて天狗面を奉納する習わしとなり、天狗の山として賑わってきました。



中峯尊大薩埵を祀る中峯堂拝殿

# 特集 開国の瞬間に立ち会ったまち 下田

静岡県下田市は伊豆半島南東部に位置し、温暖で山と海の自然に恵まれたまち。約二万人と県内で最も人口の少ない市ですが、江戸時代には「出船入船三〇〇〇隻」といわれるほど、風待ちの湊として栄えました。

幕末にペリーが来航し、日米和親条約付録「下田条約」締結の舞台となり、日本最初の開港場になったことでも知られ、昨年（二〇二四年）、開港一七〇周年を迎えました。

下田条約締結の舞台となった了仙寺（日蓮宗）や、日露和親条約が調印された長楽寺（高野山真言宗）、ペリーロードやハリスの小径など、今も開国の足跡が色濃く残されています。

また、日本最初の米国総領事館となったのが玉泉寺（曹洞宗）で、境内には初代総領事ハリスの名を冠した記念館や、米露の黒船乗組員が眠る日本初の公式外国人墓地もあります。

そして下田は、ハリスに仕えた斎藤きちを題材に描いた「唐人お吉」の物語や、渡航を夢見て黒船への密航を企てた吉田松陰ゆかりの地でもあり、宝福寺（浄土真宗本願寺派）は、勝海舟が土佐藩主・山内容堂に坂本龍馬脱藩の赦免を得た「坂本龍馬飛翔之地」としても知られています。

激動の開国に接した下田を本特集では紹介します。